

入選

いつのまにかの親切

広島県 広島学院中学校

3年 松岡大晴

夏休みも終わりに差しかかった日の朝、僕は住宅街の中を一心不乱に走っていた。中学校の陸上部に所属する僕は、秋に行われる市の駅伝に向け練習をしていた。その日は部活がないため、朝から家の近くのロードで走っていたのだ。

その住宅街は山の斜面に位置し、坂道が多い。練習には最適だが、坂を走るのは平地を走るより疲れるため苦手で、さらには部活のない日の自主練であったから、モチベーションはまったく上がらなかった。そのため渋々と家を出て、体操をし、目的の場所へ向かった。

その日は始め、長い上り坂の後、坂を下り、元の場所へ戻るコースを3周する予定だった。目的地に着くまでに、朝だからか多くの人が散歩するのを見かけた。そして、2つの道が交差する地点に着くと、僕は走り始めた。

最初は体も軽く、呼吸も楽だった。しかし上り坂の半ばあたりで足は重くなり始め、苦しくなってきた。それでもなんとか坂を上り終え、足を休ませながら坂を下りていった。まだ1周目だったが想像以上の疲労を感じ、また朝からのモチベーションの低さもあって、再び坂を上るときには、もう走るのをやめたい、どうせ今日は自主練なのだから適当でいいだろう、と考えていた。

しかしそのとき、声が聞こえた。

「ガンバレ！」

最初は驚いた。意味も理解できないまま声の方向を見た。全然知らないおばあさんがいた。おそらく散歩していた人だろう。「頑張れ！」そう言ってくれたのか。衝撃と嬉しさがこみ上げてきた。自分を応援してくれる人がこんなところにいた。

実は僕はその夏、引っ越しをしていた。生まれ、これまで生きてきた家を離れ、遠くへ越してきただけに、それは大きなできごとだった。引っ越した先は、得体の知れない気味の悪い場所にすら感じた。そこで走っていたときにかけてもらった応援の言葉だけに、嬉しかった。元気がでた。

そして、今度こそ一生懸命に走り始めた。足は重く、呼吸も苦しかったが、心は軽かった。2周目の坂を上りきり、下り、そして3周目へ。坂を上り始めると同時に、足は今まで以上に重くなった。足だけでなく肺や胸の中も痛い。頭だけが体を動かそうと必死だった。身体中が反抗していた。

しかし、ついに坂の上に着いた。そのまま坂を下り、ゴール。体の苦しさを、走り切った喜びが超えた。体操をして、家に帰ってから思った。あの声援を送ってくれた人は、なぜ僕にそうしてくれたのか。自分はこう考える。あの人は習慣的に他人をはげますことがあって、例えばいっしょに歩く仲間に対してとか、それでいつものように僕に声援を送ったのでは、と。

いつもしている当たり前が、僕のような人を元気づけることもあるのではないだろうか。